

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 上山和雄著 『日本近代蚕糸業の展開』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂口, 正彦, Sakaguchi, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000356

〔書評〕

上山和雄著 『日本近代蚕糸業の展開』

坂口正彦

本書は上山和雄先生（以下、上山氏と表記する）による単著である。本書の説明にしたがえば、蚕糸（養蚕製糸）業とは、蚕が吐き出した細い糸を繭からほぐして数本撚りあわせて一本の生糸にするものである。こうした作業のなかで、原料である繭の産地や種類、繭の処理方法によって最高級品から大衆品にいたる多様な生糸が生産される。蚕糸業は近代日本における最大の輸出産業であり、本書は近代日本蚕糸業の特質を説明したものである。

序章では網羅的に蚕糸業史研究を取り上げる。なかでも二冊の論稿に対する指摘が重要である。第一は石井寛治『日本蚕糸業史分析』（東京大学出版会、一九七二年）である。石井氏の研究は製糸業の経営を「優等糸生産類型」と「普通糸生産類型」の二つに分類し、後者が日本蚕糸業の主流を形成したと述べたものである。この「普通糸生産類型」は、前貸金融によって横浜生糸売込問屋（生糸は主に横浜を経由して輸出された）に從属している。それゆえ「普通糸生産類型」は、養蚕農家から繭

を低価格で「買い叩き」、農家の子女たる製糸工場労働者(女工)を低賃金にとどめることにより、農家の経営的發展も阻害されることになった。このように日本蚕糸業には、横浜生糸売込問屋―製糸家―農家という「重層的階級構造」が存在した、という議論である。¹⁾これに対して上山氏は、こうした枠組みは時期などの範囲を限定すべきであり、後述のように、本論において石井氏の見方とは異なる蚕糸業史像が提出されている。

第二は中林真幸『近代資本主義の組織』(東京大学出版会、二〇〇三年)である。上山氏の整理によると、中林氏は日本蚕糸業の展開を「最適反応」の繰り返しによって適合的なシステムが形成されていく過程として捉え、「最適反応」をなした地域・企業のみが「適者生存」という歴史像を提示したとする。上山氏は、中林氏の方法では「歴史の多様さ、豊かさはいくらににならない」との見解を示す。

各章を紹介する。第一章「第一次世界大戦前における日本生糸の対米進出」では、米国市場に日本生糸が圧倒的なシェアを占めるに至った経緯と根拠が明らかにされる。一八九〇年代後半から一九一〇年代にかけての日本製糸業は、低糸価を維持しつつ、中位の糸価を中心とする「良糸」の生産体制、すなわち中等糸生産体制を築いていった。需要の限定された最高級格の

生糸ではなく、アメリカにおける中・下級絹織物市場の發展等に対応して「良糸」を中心に生産したことが、日本製糸業躍進の要因であったとの分析結果を提示した。

第二章「蚕糸業における中等糸生産体制の形成」では「良糸」、すなわち中等糸の生産がどのようにして可能になったのかが分析される。長野県小諸や上田の製糸家等は、アメリカ生糸市場の動向(糸況)に応じて、中等糸を中心としつつ、柔軟に糸格(生糸の質を定めるランク)を変え、糸質重視か生産性重視かの選択を容易に行うことのできる、いわば糸況対応型経営を展開しはじめる。こうした経営を可能にしたのは蚕糸業の技術革新に求めることができるが、同時に中央・地方の蚕糸業政策も大きな役割を果たしたという。上山氏は「製糸家の中等糸生産へのシフトと糸況対応型経営の展開、それを円滑化する中央・地方の蚕糸業政策、これを中等糸生産体制と呼べば、その形成が日露戦後蚕糸業の発展の特徴であった」とまとめる(八五頁)。

第三―七章は個別事例研究であり、中等糸生産体制の変容や糸況対応型経営の具体相を中心に論じたものである。第三章「筒井製糸と四国の蚕糸業」は蚕糸業の後発地域ながらも、明治後期から急速に發展した四国の蚕糸業が論じられる。四国は海に隔てられているため、原料となる繭や製糸工場の労働者(女工)

を確保するために有利な立地にある。こうした条件において筒井製糸（徳島県麻植郡嶋島町）は、糸質・糸量の両方に対応できる糸況対応型経営を実現させ、優良製糸としての地位を築いていったという。

第四章「両大戦間期の生糸市場と郡是製糸」では郡是製糸の経営、なかでも販売政策が分析される。郡是製糸といえは中等糸というよりも、最高級糸の生産を展開したことで知られるが、こうした特質も制度や市場の変化に応じて変容していった。すなわち、プレミアムを獲得し得る最高級生糸生産を志向する場合もあれば、作業工程の効率化や糸量を重視し、糸質をあえて抑える時期もあった。また郡是は横浜生糸売込商に対する依存から脱却し、独自の販売方法を築いたが、その方法も成行約定と呼ばれるものから、直輸出の開始、ニューヨーク・ゲンゼシルクの設立へと変化していった。

第五章「養蚕主業村と大規模養蚕農家の経営―下伊那郡上郷村原家三代の経営―」、第六章「両大戦間期における組合製糸―長野県下伊那郡上郷館の経営―」は、代表的な組合製糸（養蚕農家が出資して作った製糸工場）地帯である長野県下伊那郡、なかでも上郷村を事例として、蚕糸業の展開を描いたものである。第五章では大規模養蚕農家の史料（原家文書）や上郷村役

場文書、第六章では上郷村の組合製糸「上郷館」の経営史料等を通して、組合製糸「上郷館」が糸況対応型経営を実現したことを示した。糸況対応型経営を可能にした条件とは、組合員を「村落共同体的」規制によって強力に組織し、原料繭統一政策（良質、かつ同種類の繭を集めれば、それだけ良質の生糸ができる）を貫徹し得た点、そのために一村完結型という組合製糸「上郷館」の規模が適正であった点、恐慌直前に財務状態を大幅に改善し得た点に求めることができる。以上の実証のうえで、上山氏は次のようにまとめる。「川しも」（製糸業）、「川かみ」（養蚕業）を問わず、一九二〇年代後半以降における市場構造の変化のなかで、発展的展望を持ち、経営を存続させることができたのは、「川しも」（製糸）から「川かみ」（養蚕）までの一元的経営を達成し得た製糸経営であり、その代表の一つが組合製糸という経営形態であったと。

第七章「長野県下伊那の営業製糸、喬木館の経営」では、上郷村の東隣に位置する長野県下伊那郡喬木村の小規模営業製糸・喬木館の経営を検討する。喬木館は、決して先進事例とはいえないものの、糸況に対応した経営を行ったからこそ経営が存続しえた点が、一八九〇年代から一九三〇年代をスパンに描かれている。第八章「両大戦間期の生糸貿易」では、両大戦間

期における生糸貿易の変容を描く。一九二〇年代後半から三〇年代にかけて生糸輸出に対する行政の介入が生じ、また、恐慌や人絹の進出によって市場構造が変化した。こうしたなかで商社の動きをみると、三井物産や日綿は為替等によって経営の困難をカバーする一方、日本生糸・旭シルク・原商店をはじめとする生糸専門商社の打撃が大きかったことが示される。

終章「蚕糸業の『一元的経営』へ」では、一九三〇年代における蚕糸業の展開を「すみわけ」と「一元化」という二つの視点でまとめる。「すみわけ」とは、高級生糸を生産しつつも多様な糸格を生産し得る郡是製糸や組合製糸等と、日本国内向け原料生産者等として生き残っていく製糸家に分かれていったことを示す。「一元化」とは、養蚕業と製糸業の一元的経営を指しており、製糸業でいえば特約組合による養蚕業の囲い込み、養蚕業でいえば組合製糸形態による製糸業への進出を意味する。以上が本書の要約である。

上山氏の石井寛治氏に対する批判は明快である。若き頃の上山氏は、石井氏の研究を次のように評した。『構造論』によって蚕糸業の一つの像を象徴的なシエーマで浮かび上がらせる^②のではなく、「蚕糸業各部門の独自の運動のあり方を検出」すべきである。本書によって上山氏は、「蚕糸業各部門の独自

的な運動」を追究し、中等糸生産体制、糸況対応型経営の成立・変容という新しい視点により、近現代日本蚕糸業の展開を描き直した。丹念な調査をふまえたものであるだけに、その議論は説得的である。

その一方、中林真幸氏の研究に対しては、もつと理論的な対話ができただけではないかと期待してしまった。たしかに上山氏は、蚕糸業をめぐる各アクターの多様で豊かな姿を描出し得ている。しかし、上山氏が提示した糸況対応型経営というものが、中林氏が示した「最適反応」をなしていく経済主体の姿と、どの点で共通し、どの点で相違するのか。上山氏にとつては自明かもしれないが、重要な論点ゆえ、積極的に論じていただきたいと感じた。

本書の「あとがき」には次のような記述がある。「本書に収載したもつとも古い論文は一九八三年のものである。こうした古い論文を含めて編むことに若干のためらいもあった」（三四五頁）。こうした記述に反して、全く古さを感じさせない論稿となっている。上山氏が既存の理論にしたがってストーリーを描くのではなく、史料に基づいて柔軟に歴史を紡いできたからこそ、論文の鮮度が保たれているものと考えられる。上山氏は日本経済史研究・日本近現代史研究に対して重要な視点

と実証を提供したといえる。

(A5判、三四〇頁、日本経済評論社、二〇一六年十一月発行、
定価八〇〇〇円＋税)

注

- (1) 石井寛治『日本蚕糸業史分析』(東京大学出版会、一九七二年)のほか、
松村敏『戦間期日本蚕糸業史研究』(東京大学出版会、一九九二年)、
井川克彦『近代日本製糸業と繭生産』(東京経済情報出版、一九九八年)
を参照した。
- (2) 上山和雄「書評石井寛治『日本蚕糸業史分析』」(『史学雑誌』第八二
卷第一一号、一九七三年)七七頁。